

智のシンポジウム ー文明・文化と科学技術ー

開催の趣旨

このシンポジウムでは、常に、「次の世代に手渡せるものはなにか」を主要な検証課題とします。

巧妙な「言い換え」が通用している昨今、これらの考え方の裏にある真実を見通したい。

なにごとによらず、現状や事実を知ろうとしなければ、ことは始まらないのです。

なんらかの「障碍」を有する人々に対する「バリアフリー」が、大勢であるこの国の民の成熟度を示す「民度」としての自己客体化、更に、社会の体制として整備された「仕組み」としてそれらが実現されているとは見えません。おおまかに、状況を見たというほどの「視聴覚情報」が、あるいは、それが社会情報だと表層処理のように付着させた「言葉」や「観念」が人の心の表面に薄く纏わり付いている、それが実情のようです。

ハードとソフトの両面からみたインフラの不整備、教育機関での「バリア」と「バリアフリー」の違差を考えさせるカリキュラムや講座の欠如、実態として障碍を隔離する社会の強い日常的な傾向、公的機関の対応や担当者の偏見にみる披障碍者への配慮の欠如、生活支援機器開発の不足不備、介助必要度に合わせた支援要員の配置や介助犬育成予算確保の不足、医療治療の現場における疾病情報周知授受体勢の不備、障碍支援作業のそれらの多くを個々の誠意やボランティアに依存する社会の体質、年齢層に関係のない「見て見ぬ振りをする」社会構成員たちの意識的無関心、障碍者支援を口実にしたビジネスと詐欺行為、などこの国の社会システムの問題点は数え上げれば切りがないと言えるでしょう。

なによりも、社会と教育環境が注入する「差別（観）」が全体的な「障碍（者）」への心のバリアをつくる、そのことの始まり、そのことが始まりである事実があります。

人としての心の在りようを点検すると、この歴史社会的な事実突き当たるのです。

状況に直面した討論と、共同作業に参加し、自分に何か出来るのかとの問いかけを…。

それには、まず、物的条件充足への欲望なのか、あるいは、思索能力の付与強化なのかまたは、人が試行する営為への判断力と意志なのか、さらに、環境に対する認識と社会的対応への参画なのか、はたまた、社会構造の改変へという自己投企なのか、と。

ただ、それらのその作業は「類的存在としての人間」の在りようの点検を、個々人の自己への認識を当事者として主体として深めることから始まるのではないのでしょうか。

「人間と科学（技術）の関係」を再三、再四と問うこと、問い続けること…。

それは、世界中が早急に解決すべき課題としている「地球高温化を食い止めること」の具体的な行動や、「この高温化はなぜ引き起こされたのか」という地球そのものの環境変化の素因の解明と明確化も、社会科学的な議論の課題あるいは論点として含むものです。

地球を包む環境の悪化によって農作物や水の分布に明らかな変化が発生し、自然植生の繁殖条件や耕作物（食物）の作況・作柄の変化が起きつつあります。

逆浸透法による海水の真水化では根本的な解決にならない、地球が保有する飲用水総量が欠乏する危機が国際社会で提唱されるようになりました。

地球を取り巻く偏西風・季節風の流れの変化と乾期と雨期の発生時期の変化、また強風雨の移動を伴う急速な亜熱帯域の熱帯化、海水の温度差還流に変化が起きた異常気象とハリケーンの発生など、従来型気象予報用データでは読み切れなくなっているのです。

シミュレートされるY染色体の消滅、抗生物質多剤抗体菌の頻発や、人から人への感染で変異が懸念される新型ウイルスの再三の出現、遺伝子組替え加工食品の増加、公的機関によるクローン動物の食品化安全宣言、医療における生物学的製剤の開発と多用、などなど人類が抱える将来と未来への不安や懸念について、もっと論じられる必要があります。

「文明・文化と科学（技術）との相関性」は、視点を拡大し深めて論じられるべきです。

2011年3月11日・東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故への対応に象徴されるような、いまの、社会システムの未熟度・不完全さを点検しつつ議論すべきです。

現在、あの日からだいぶ経ちますが、本当に復興は進んでいるのでしょうか？

次世代や次々世代に、伝え手渡せるものは「なにか」……………。

現状を検討すること、討論すること、その具体的な内容を提起することを通して、共に推考し、峻別した研究課題を明確にするための協同作業が必要になっているのです。

新たな共同研究の始動への討論の場を、再度提起するために、「智のシンポジウムー文明・文化と科学技術ー」を開催します。

人や社会の出来事に、人と社会の在りように、諸々の関心ある方々の参加を、是非。